

みおしえ

心の処方箋



——浄土宗埼玉教区青年会——

明日に生きる

勝願寺 藤田 俊彦

私は気が弱いというか気が小さい。ほんの些細なことで思い悩む。するとお腹が痛くなってくる。本当に痛いのだ。俗にいう神経性胃炎かもしれない。幼い時からそうだった。だから私にとって常備薬は腹の薬である。そう、あの黒くて小さくて、もうれつな臭いのする丸薬である。あれを飲むと自然とお腹が痛いのが修まる。あの臭いを嗅ぐとなんとなく落ちついてくるのだ。ただし薬を飲むだけでは直らない時もある。そうなれば当然、お腹を暖めたり、消化に良いものをとったり、あらゆる努力として直そうとする。平気さ！といって放っておくと慢性になってしまうらしい。これは苦しいと聞いたことがある。一度だけ、食中毒にかかる一歩手前までいったことがあるが、本当に苦しかった。あの体験は二度としたくない。まさしく一生懸命にお念仏を称えてしまった。早く直りま

すようにと。。。これこそ苦しい時の神だのみである。ところで一般に、苦しい時の神だのみ、かなわぬ時の神だのみという、神仏をあてにして自分では何もしない場合を指すが、これは常識で考えても都合が良すぎる。以前読んだ本の中に「信心は神仏をあてにすることではありません。あてにするような自分勝手な心を反省するのが信心です」という言葉があつたが、もつともな話である。もし神仏が全てをかなえてくれるならば、なんにもせずに、ただひたすらお願いすればいいのである。

自ら最大限の努力をしてこそ、そのプラスアルファとしての助けが受けられるのではないか。先ほどの腹いたではないが、お腹を暖めたり、消化の良い食事を摂ったり、薬を飲んだりするのと同様に、自らを反省し、今、私は何をすべきかを考えた上で、どこまでも勝手きわまらない、おのれ中心の救われようのない私だと反省した自分に気がついた時、自然とお念仏を称えることが出来、阿弥陀様が救いの手をさしのべているのに気がつくはずである。

「阿弥陀如来の光明は偏く十方世界を照らして念仏の衆生を摂取して捨て給わず」とは観無量寿経の一文である。念仏を唱えるものはどこにいても全て救い取ってくれるのであるただ私がそれに気づかないのである。阿弥陀様だけではない。御先祖様だってそうだ。発願文の中に「かの国に到り終つて六神通を得て十方界に入つて苦の衆生を救摂せん」とある。苦の衆生

とは私のことである。冷静に自己を見つめ、反省する心がなければ、いくら救済の手をさしべられていても気づかないのである。

人は生きているのではない、生かされているのだ、なんと自己の意志によつて変えられることが少いのかに気づくべきなのである。

例えば飯を食う時、口は自分の意志で動かしかみ込むことが出来るが、胃や腸はどうであらう。少しつかれたから休もうと思つても休むものではない。自らの意志によらず栄養を吸収し体の隅々にまで行きわたらせてくれる。米一つとっても自分で作るのではない。農家の方々が稲を育ててくれるし、稲が育ち実をつけるのは自然の営みである。魚にしても、肉にしても育つていくのは自然の営みである。これらの恩恵に預かつて私は生きているのだ。当然のことあたりまえのことであるが、それすら気づかないのは何と愚かな事か。

多くの恵みを受け、多くの守りを得て生かされている、生きていくと気づいた時自然と手を合わせ、南無阿弥陀仏と称えるはずだ。

阿弥陀様を始め、御先祖様等に守られているという強い自信と、多くの恵を受けて生かされているという謙虚な意志を持つてお念仏をすることは、「念仏を信ずる人は仮令いかなる病を受くれども皆これ宿業也」と、どんな時でも場合でも、それを念仏の中に正しく自分のものとして受けとめ、のりこえていく道が開かれてくるのではないか。

大切な言葉

三福寺 鼻田 義郎

お経というものが有ります。私達、仏法を奉じる者にとって聖典です。取りわけ、浄土三部経は、浄土宗の拠り所となる大事なお経です。私達は浄土宗に帰してより、無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経は最も親しいお経です。そのなか、阿弥陀経より二つの箇所を挙げたいと思います。

阿弥陀経は、日常のお勤めはもちろん、法事等でも読まれるとりわけ親しく大切なお経です。何度となく読誦する、声を出しその字句を読むというなかで、お経の言葉が自分のなかにしっかりと入っていくように思えます。そうして、もうこれは自分の身体の一部なのだ、お釈迦様が説かれたのを、その座に居る様に、有難く尊く聴聞しているのだ、と感じるのです。

菩提樹の葉が風に揺れ、心地良い木陰のもと、釈尊を囲む様に仏弟子、阿難尊者、舍利弗

尊者等々が居られるなかで、私もその説法を親しく聴聞するのです。

釈尊は説かれます。

舍利弗よ、善き男の人、善き女の人がいて、阿弥陀仏を説くことを聞き、阿弥陀仏の名号をしつかりと保持すること、あるいは一日、あるいは二日、あるいは三日、あるいは四日、あるいは五日、あるいは六日、あるいは七日、と一心不乱ならば、その人の臨終の時に、阿弥陀仏は多くの聖衆とともに、かの臨終の者の前に立たれるであろう。この人は命終わる時、心が迷い惑うことなく、すみやかに阿弥陀仏の極楽国土に生まれるであろう。

阿弥陀仏が居られる西方極楽世界に生まれる(往生)のです。名号を保持すること「一心不乱」ならば「すみやかに阿弥陀仏の世界に生まれる」という所が、確かなこととして思われます。永遠の真理を体得した、大いなる慈悲の有る釈尊が説かれるのです。

次に、以下の様に説かれる所が有ります。阿弥陀経の最後の方です。

舍利弗よ、阿弥陀仏の仏国土に生まれたいとすでに願をおこした人、あるいは今おこしている、あるいは願をおこすであろう人は、誰でもすべて、この上ない正しい覚りから退いたりすることがないであろうし、あるいは、阿弥陀仏の国土にすでに生まれているのであるし、あるいは今生まれるのであるし、あるいは生まれるであろう。

なんと力強く、また尊い言葉ではないでしょうか。私の前にも後にも彼の仏国土に生まれようと発願する人が居り、もうすでに彼の仏国土に生まれ、また生まれるのです。この所は、釈尊が私達に示して頂いた確かな道筋だと思われま

す。

最後にもう一つ挙げたいと思います。法然上人の選択本願念仏集に、善導大師の観経疏を引いている次の言葉が有ります。

もし衆生、行を起こして口に常に阿弥陀仏の御名を称えれば、仏はこれをお聞きになる。身で常に仏を礼し敬まえば、仏はその人を御覧になる。心で常に仏を念じれば、仏はそのことをお知りになる。衆生が仏を心に想い念じるならば、仏もまた衆生を想い念じられる。阿弥陀仏と衆生の身、口、意の三つの行ないは、互いに離れない。

法然上人は次の様に続けます。

衆生が仏の御名を称えなければ、仏はこれをお聞きにならない。身で仏を礼さなければ、仏はその人をご覧にならない。心に仏を念じなければ、仏はその人をお知りにならない。衆生が仏を想い念じなければ、仏は衆生を想い念じなされない。阿弥陀仏と衆生の三つの行ないは、常に離れて疎遠になっている。

まさに、私達、衆生と御仏(みほとけ)とは互いに応じているのです。私達の働きかけが仏との間を、親しく近いものにします。これは実に、有難く大切なことに思われます。

有頂天

私たちは、日常、意思疎通のために言葉を使います。普段なにげなく使っている言葉には、仏教より出ているものもたくさんあります。それらの中には、明らかに仏教の言葉であるとわかるものもあれば、全くわからないものもあります。

仏教の言葉の中に『有頂天』という言葉があります。有頂天とは、世界の最高位にある天のことを意味します。仏教では、地獄をはじめとする六道などの迷いの世界の一つに天上界という世界があります。その中で最勝のものが天上界です。天上界には欲界、色界、無色界などの別があつて、この中の最高位を有頂天といいます。この有頂天に昇れば、どんな望みも叶えられないことはない。そこから夢中になったり、得意の絶頂にあることをいうようになったそうです。

しかし僅かなことを喜んで、あまり有頂天になると足を踏みはずして奈落（地獄）に落ちるから御用心。合掌（S・I）

【編集後記】

▼今回、鼻田上人は初登場、藤田上人は二度目の登場となる。それぞれに味もタイプも異なる文章をいただいた。ひたすら感謝。

▼医学の進歩は著しく、すでに結核は怖しくなくなり、やがて癌が、さらにはエイズも、その治療方法が確立することだろう。その一方で、病める現代人の心を、本当にいやす薬はあるのだろうか。そんな疑問のもとに、両上人に、自分にとつての心の処方箋を考えていただいた。その解答が念仏であつた。ただし、困った時だけ念仏を利用すればいいとゆうのではない。肝心なのは、本当の救いとは何かと、絶えず自分へ問い続けることであろう。

▼本誌に関する忌憚のないご意見・ご感想を左記の住所までお願いします。

千三三五

埼玉県戸田市中町二―四―十一
『みおしえ』編集室代表 渡辺昭彦